

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
企画研究プロジェクトⅠ(教員自由企画型) 2018年度研究成果報告書

|       |                            |      |   |
|-------|----------------------------|------|---|
| 研究代表者 | 所属・職名                      | 氏名   |   |
|       | コミュニティ福祉学部・教授              | 濁川孝志 | 印 |
| 研究課題名 | 現代の神話(民話)づくりプロジェクト 一出雲の国から |      |   |
| 研究期間  | 2018年度                     |      |   |
| 研究経費  | 100千円                      |      |   |

【研究の概要】

二十世紀を代表する歴史学者であるアーノルド・J・トインビーは、「子供の頃に民族の神話を学ばなかった民族は、例外なく滅んでいる」と指摘している。これは、「神話を学ぶことが民族存立の一つの要件である」ことを示し、現在の日本人が日本神話を学んでいないことの問題点を示唆するものである。ここで、「民族」を「地域」や「コミュニティ」に置き換えてみると、この指摘を地域コミュニティの問題としても捉えることができる。地域の構成員が自らの出自や地域の歴史・文化を背景とした共通の物語をもつ事は、地域の結束や一体感を高める上で重要なことである。そして日本各地には、それぞれの地域の民話が存在する。本プロジェクトは、地域に伝わる民話を再確認し、それをベースに新たな物語を創作し、それを地域住民が共有することで地域の絆を深めようとする試みであった。

今回は、日本神話の舞台でもある島根県出雲市大社町地区と多くの民話が存在する愛媛県今治市玉川地区を物語創作の地域として選んだ。今治では、Rumi's House オーナーの瀬尾留美子氏、出雲では『GALLERY 記田家』のオーナーである金築伸子氏、そして若者の教育を中心に地域の活性化に尽力するトリニティカレッジ出雲医療福祉専門学校の高橋恭子氏の協力を仰ぎ、地域の皆さんの民話との係わりについてお話しを伺った。そこで、内容の概要を以下に記す。

- ①地域の民話はあるが、それが日常の中で話題に上ることは少ない。
- ②地域と言っても、どこまでを地域とするのか。町なのか、近隣の町村なのか。あるいは県まで含めるのか。苑あたりの認識により、民話の捉え方が異なる。
- ③世代によって民話の捉え方が異なり、年長者ほど、物語に人生の示唆的なものを求める傾向がある。
- ④地域にまつわる神話には関心が強いが、民話にはそれほど思い入れが無い。
- ⑤既存の民話や神話をベースに、地域の子供達に向けた新しい物語を創るのは面白い。それを、学校などで発表出来たら良いと思う。

これをベースに、今後、地域住民による新たな民話創りを進めたい。このプロセスにより、地域コミュニティが活性化し、地域の絆が深まることが期待される。同時に、地域の歴史や文化を再認識する機会にもなり、住民がコミュニティとは何かを問い直す切っ掛けにもなりうると考えられる。これはコミュニティ福祉学部が学部理念とする「生活者である住民が主体となってコミュニティを形成する」プロセスと捉えることができ、今後の成果が期待される。